

日本のノーベル賞受賞者の揺籃を訪ねて—京都大学

中央民族大学学生代表

見学日時：2016年5月25日（水） 14:00-20:00

見学場所：京都大学

見学概要

5月25日午後2時、第18回「走近日企・感受日本」中国大学生訪日団は京都大学に到着した。まず初めに、教室にて京都大学の先生から歓迎の挨拶と、京都大学の歴史や現状についての詳細な紹介があり、その後私たち代表団は京都大学の学生と共に4つのグループに分かれ、エネルギー問題・人工知能問題・貿易協定問題および教育問題について熱のこもった討論をし、最後に各グループの代表がそれぞれ5分間の総括発表を行った。発表の後、中日双方の学生および先生は京都大学内で行われた懇親晩餐会へ参加した。今回の交流を通じ、私たちは日本のキャンパス文化についてより深く知ることができた。



知っていますか？

問：京都大学はなぜ日本におけるノーベル賞受賞者の揺籃となっているのか。

答：現在、科学技術分野のイノベーションおよびイノベーション人材やグローバル人材の育成は、一流大学における最重要課題となっている。京都大学は自由な学風の尊重により、科学技術分野のイノベーションや人材育成を推し進めており、これは京都大学設立当初からの基本理念でもある。京都大学では、ほぼ全ての教員や学者が基礎教育に携わっており、学生は学部の垣根を越えて全ての専攻の講座やゼミに参加が可能で、一流の学者と触れ合い、さらに最先端の研究現場において視野を広げることができる。こうした自由な学風の下、京都大学はすでに9名のノーベル賞受賞者と2名のフィールズ賞受賞者など多くの世界的科学研究分野のリーダーを輩出している。

この他、京都大学は日本の自然科学研究における重鎮として、人文学科についても非常に重視している。京都大学の優れた物理・生物・医学など自然科学研究と並び称されるのは、「京都学派」と呼ばれる西田哲学と中国学

研究である。京都大学では多くの自然科学学者が同時に人文・社会科学研究にも従事している。京都大学の山極総長自身が携わっている霊長類研究も、自然科学と社会科学の学際境界領域である。山極総長は今年の京都大学でのTDExイベントの席上、チンパンジーの研究を通じた暴力性の成因について、「科学だけを頼っている、人類は幸福にはなれず、また生存していく勇気を得ることもできない」と述べている。こうした人間本位の理念も、京都大学が多くのノーベル賞受賞者を輩出してきた主な理由の一つである。



問: 京都大学の教育体制や学術研究は中国国内の大学と比べて何が違うのか。

答: 団員A: 京都大学の学術的気風は中国国内と比べてより気軽で自由である。調査によると、学生の本当の興味や自身の潜在能力の啓発のため、京都大学には多くの特徴的な試みがある。例えば一部の専攻では、その他の専攻の履修単位での代替が可能で、専攻科目を含むほぼ全ての講義で出欠はとらず、学部の変更も比較的容易である。これらは中国国内の大学との大きな違いである。

団員B: 私にとって最も印象深かったのは、京都大学の学術研究者の驕りがなく、手を抜かないといった学問に対する着実な姿勢である。京都大学における著名なショウジョウバエの実験を基に言えば、1954年に生物学者の森主一氏がショウジョウバエの暗黒飼育を始め、60年以上経過した現在まで継続されている。1500世代を経たこれらのショウジョウバエには、暗黒状況下での生活に完全適応するために遺伝子に数十カ所の変異が見られている。学者たちの長年に渡るひたむきな観察研究といった、功をあせらない根気強さや変わらない意思是、中国の大学の研究者が学ぶべきものである。

感想

今回の京都大学への訪問や学術交流を通じてとても感慨深いものがあった。ここでは中日両国の学術研究について感想を述べたいと思う。

まず初めに研究面において、中国には人文学科、特に文学・歴史・哲学などの学科を軽視する風潮が存在している。中国の学生の積極性やモチベーションは日本の学生より高いが、歩みを緩やかにし、心を落ち着けて、「当面何の役にも立たない」ものに対して時間や労力を使うことも必要かもしれない。森教授のショウジョウバエの実験のような科学研究プロジェクトは、中国の科学研究環境において生存していくことができるだろうか。こうした研究の応用価値について疑問を持つ人がいるのではないか。また論文発表回数や被引用回数で研究者を評価する人がいるのではないか。もちろん森教授もこのショウジョウバエの観察だけをしていただけではなく、他の研究プロジェクトも行っていただろう。但し、こうした研究が中国において生き残る余地があるのかどうか、これこそ私たち学問を修める者が自問しなければならないことであり、また現在の学術政策の制定者が考えなければならないことである。大国そして世界規模のエコノミーとして、日の目を見ない研究を願っている一部の科学者に対して、単純で一見応用価値が無いかもしれない科学的問題について考える余地と条件を提供しなければならない。

次に、現在中国の大学生は日本の大学生と同様に IT ツール、インターネットやソーシャルメディアなどに日頃から依存しており、実際の学習や生活は狭く小さな範囲に限られるといった内向的な傾向にあり、それにより偏った、そして極端な考え方がだんだんと増えている。そのため、学生に対しさらに社会实践や対話、そして国際的な研修や実習の機会を提供し、学生が野性的でたくましい精神を育み、自ら積極的に探究し、本当の知識を身に付けるようにしなければならない。まさに山極総長が提唱する、京都大学が現代において直面している状況に対しての改革に向けた新たな計画である「WINDOW 構想」のように、「世界や社会に通じた窓を開け、風通しをよくし、野生的で賢い学生を育てる」ことが必要である。